稲敷市埋蔵文化財調査報告書第４集

移動通信無線鉄塔建設事業
佐倉原古墳群地内埋蔵文化財調査報告書

佐倉原古墳群

平成20年３月

稲敷市教育委員会
イー・モバイル株式会社
㈲山武考古学研究所

序

稲敷市が誕生して早いもので３年が経とうとしています。最近では首都圏中央連絡自動車道建設に伴う茨城県教育財団による発掘調査が市内のあちこちで進められており、貴重な発見が相次いでいると聞いています。

このたび刊行されましたのは、イー・モバイル株式会社による移動通信用無線鉄塔建設に伴う佐倉原古墳群地内の埋蔵文化財発掘調査報告書です。佐倉原古墳群は稲波地区の北西側の台地上にあり、調査区周辺には４基の古墳が点在しております。旧榎ヶ浦に面した台地上には、佐倉原古墳群以外にも多くの遺跡が見つかっており、それだけ生活に適した住みやすい環境だったことが分ります。今でもこの台地から霞ヶ浦を眺めると、滔々と水を湛えていたかつての榎ヶ浦の姿が目に浮かぶような美しい景色が広がります。

稲敷市内には先人たちの足跡がまだまだ数多く残っています。本書も稲敷市の歴史と文化を知る上で大切な記録となるでしょう。

最後になりましたが、このような貴重な報告書が刊行されるまでには、関係各位の多大なる御協力と御支援を賜りました。感謝の意を表して挨拶の言葉と致します。

平成20年３月

稲敷市教育委員会
教育長　小川　孝

例　　言

1．本書は、茨城県稲敷市佐倉字佐倉原地内に所在する佐倉原古墳群の発掘調査報告書である。
2．調査は、移動通信無線鉄塔建設事業に伴い実施されたものである。
3．調査は、イー･モバイル株式会社の委託を受けた山武考古学研究所が、稲敷市教育委員会の指導のもとに行った。
4．遺跡の所在地・調査面積・調査期間は抄録に記載してある。
5．現地調査は、髙野浩之（山武考古学研究所所員）が担当した。
6．本書の執筆分担はⅠが稲敷市教育委員会、Ⅱ以下及び編集は髙野が行った。
7．調査に係わる実測図面・写真等の取扱いについては、本書末尾に記載してある。
8．発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸機関にご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表するものである。（敬称略・順不同）

イー・モバイル株式会社　　株式会社ナカノフドー建設　　株式会社ブレース
稲敷市教育委員会

凡　　例

1．挿図中に記載した方位は、座標北を示し、遺構実測図中の水糸ライン上数字は標高を表す。
2．遺構の標記記号は、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所の用例等を参照した。
　溝跡：SD　　土坑：SK　　ピット：P
3．遺構・遺物実測図の縮尺は遺構全体図を1/200、各遺構を1/60で、遺物を1/3で掲載してある。
4．土層観察と遺物における色調の判定は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著／日本色研事業株式会社）使用した。
5．遺物観察表の（　）内数値は現存値を表す。

目　　次

序　例言　凡例　目次
Ⅰ　調査に至る経緯　・・・・・・・・・・・・1
Ⅱ　遺跡の位置と環境　・・・・・・・・・・・3
Ⅲ　調査の概要　・・・・・・・・・・・・・・・3
Ⅳ　調査の成果　・・・・・・・・・・・・・・・4
Ⅴ　総括　・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

挿図目次

第１図　事業計画図　・・・・・・・・・・・1
第２図　遺跡の位置と周辺遺跡図　・・・・2
第３図　調査区域図　・・・・・・・・・・・2
第４図　基本堆積土層図　・・・・・・・・・3
第５図　遺構全体図　・・・・・・・・・・・4
第６図　遺物包含層・遺物出土状況図及び主な出土遺物　・・・・・・・5
第７図　SD-01・SK-01・02・P-01～06実測図・6
第８図　SD-01・SK-01・表採出土遺物・・・・7

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表　・・・・・・・・・3
第２表　出土遺物観察表１　・・・・・・・・5
第３表　出土遺物観察表２　・・・・・・・・・7

写真図版目次

図版１：遺構
図版２：遺構・出土遺物

Ⅰ　調査に至る経緯

平成19年５月21日付けで，株式会社ブレースより稲敷市教育委員会に対して埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱についての照会がなされた。稲敷市佐倉字佐倉原3089番１について，移動通信用無線鉄塔新設事業のため100㎡の面積を事業予定地としているという内容であった。

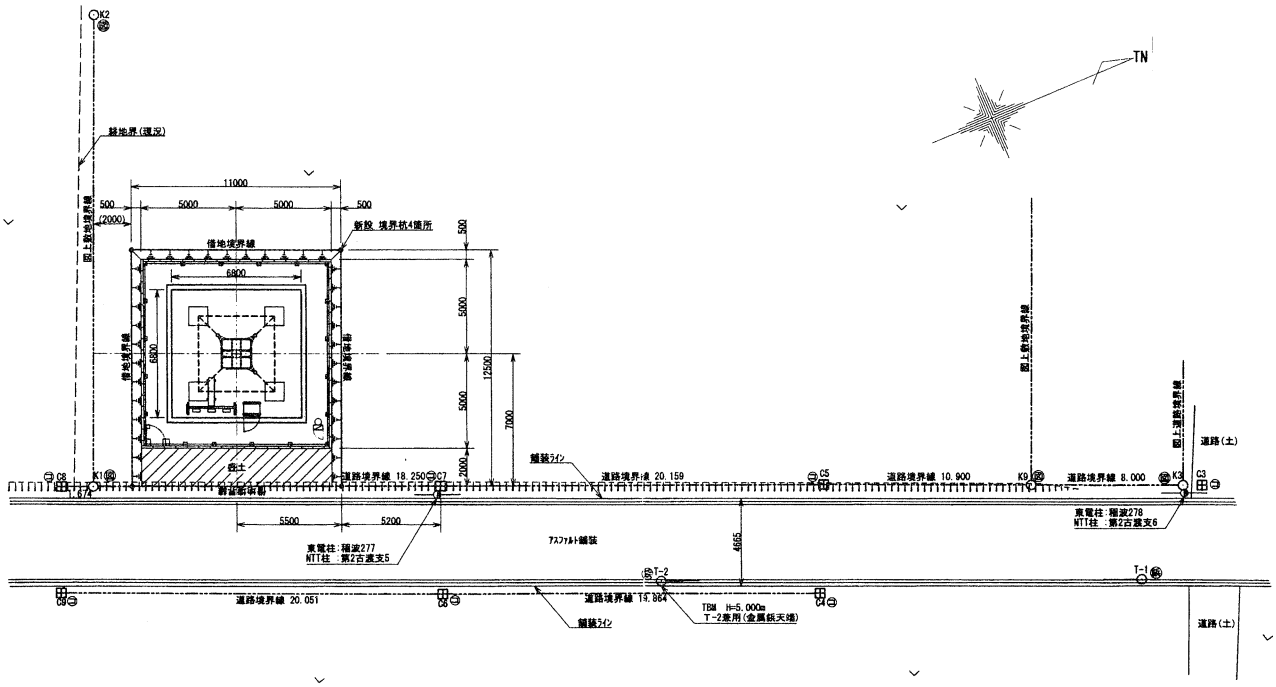
当該地は，周知の遺跡である佐倉原古墳群の範囲内に所在するため，平成19年５月29日に稲敷市教育委員会は現地踏査を実施した。事業予定地の周辺は広く畑地になっており，遺物が少量ながら散布している状況を確認し，周辺には古墳が４基点在している状況も確認した。稲敷市教育委員会は，平成19年５月29日付けで試掘調査を実施する必要があるという旨回答した。

平成19年６月30日，稲敷市教育委員会は事業主立会いのもとに試掘調査を実施したところ，溝状遺構１基が所在することを確認し，縄文土器片や土師器片が出土した。稲敷市教育委員会は，平成19年６月19日付けで試掘調査の結果と併せて，土木工事等に伴う発掘の届出が必要になる旨回答した。

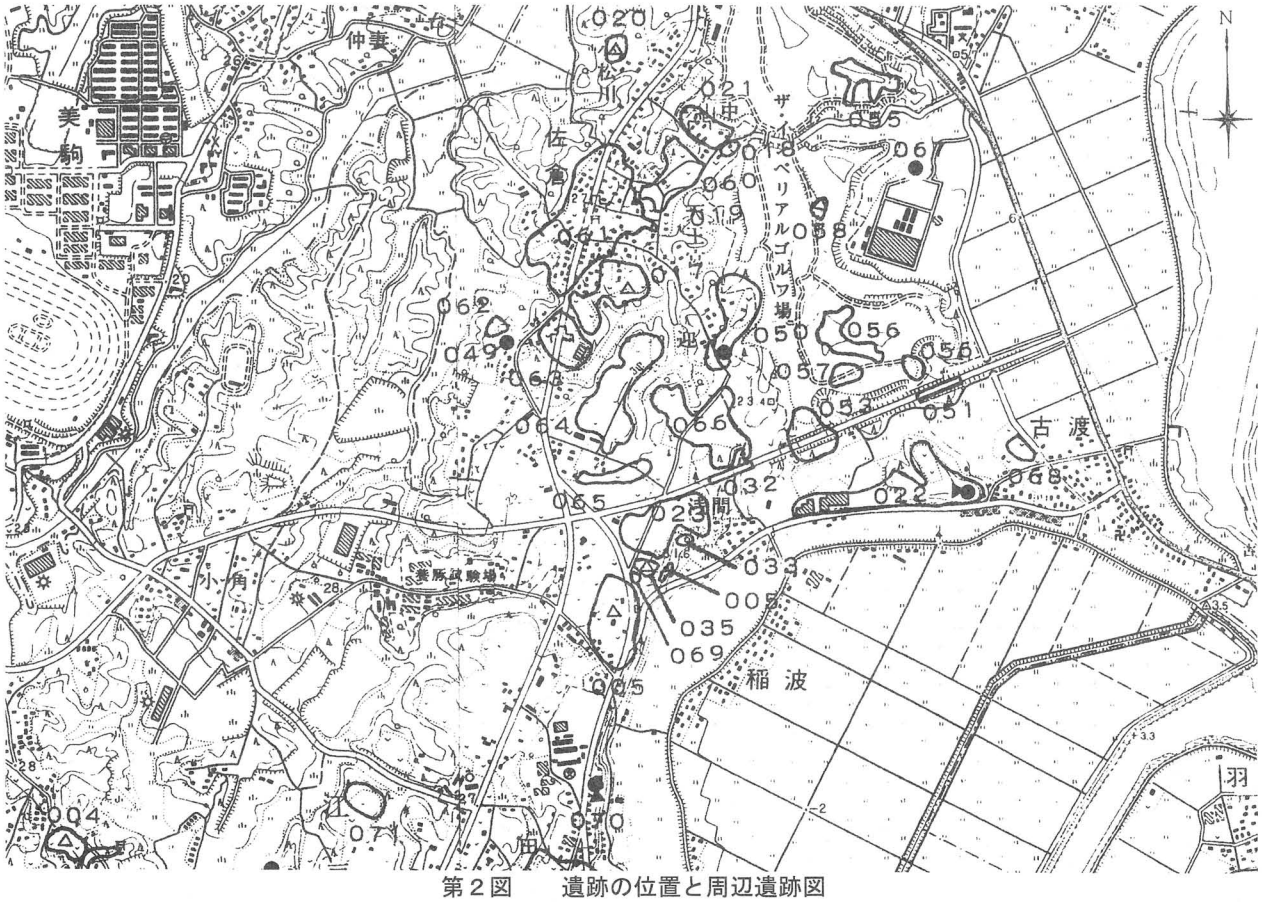
稲敷市教育委員会は茨城県教育委員会の指導の下に，事業主であるイー・モバイル株式会社と協議を重ねた結果，事業主の強い意向もあり記録保存のための発掘調査を実施するよう調整をすすめた。

平成19年９月14日，稲敷市教育委員会と有限会社山武考古学研究所とイー・モバイル株式会社の三者の間で協定書を締結し，発掘調査内容について合意のうえ平成19年10月15日から同年10月20日に現地調査を実施するに至った。

発掘調査は、10月15日より開始する。表土除去と併行して遺構確認を行う。16日より遺構の掘り下げを行い、17日は遺物包含層の掘り下げを行う。18日、終了確認。20日は埋め戻し作業を行って、現地発掘調査を終了する。



第１図　　事業計画図



第２図　　遺跡の位置と周辺遺跡図

第３図　調査区域図

Ⅱ　遺跡の位置と環境

稲敷市は、茨城県南部にあって2005年に４町村（江戸崎町・新利根町・桜川村・東町）が平成の大合併によって誕生した、霞ヶ浦南西岸から利根川流域に至る広大な面積を有する市である。市域の地形は、北部から西部一帯が標高20m前後を測る稲敷台地が占有し、南部から東部一帯が水田の広がる沖積低地となっている。

佐倉原古墳群は、市の北側にあたる旧江戸崎町の区域に所在し、稲敷台地を分断する形で霞ヶ浦へと注ぐ小野川流域の縁辺に立地している。周辺には縄文時代から中世に亘る遺跡が数多く点在している。特に縄文期の遺跡には貝塚が多いことで知られている。古墳時代では、同じ稲波の干拓地を見下ろす台地上に楯の台古墳群が本遺跡と隣接しているほか、発掘事例のあるものとしては、姫宮古墳群や県内の発見例では希少な馬具が出土している水神峯古墳等40数箇所の古墳及び古墳群が市域には点在する。

今回の調査区は、佐倉原古墳群に指定されている範囲の西寄りにあたる部分で、３号墳と４号墳の中間に位置している。現況は畑地であった。

第１表　周辺遺跡一覧表（縄文・古墳時代に関する遺跡のみ記載）

番号	遺跡名	種類	番号	遺跡名	種類	番号	遺跡名	種類
004	明神貝塚	包蔵地・貝塚（縄文）	035	台畑貝塚	貝塚（縄文）	062	長塚遺跡	包蔵地（縄文）
005	吹上貝塚	貝塚（縄文）	049	長塚古墳	古墳	063	松葉様遺跡	包蔵地
017	南平貝塚	貝塚（縄文）	050	姫宮古墳群	古墳群	064	原迎遺跡	包蔵地・古墳
018	山中貝塚	貝塚（縄文）	051	大日山古墳群	集落・塚（縄文）	065	佐倉原遺跡	包蔵地
019	天神山古墳	古墳	053	思川遺跡	集落跡（縄文）	066	寺山遺跡	包蔵地・貝塚（縄文）
020	小松川貝塚	貝塚（縄文）	055	池平遺跡	包蔵地	067	水神峯遺跡	古墳
021	殿屋敷遺跡	古墳・城館跡	056	秋平遺跡	集落	068	権現台遺跡	包蔵地
022	楯の台古墳群	集落・古墳群・城館跡	057	思川久保遺跡	集落	069	佐倉原南遺跡	包蔵地・生産跡
023	佐倉原古墳群	包蔵地・古墳群（縄文）	058	中佐倉貝塚	集落・貝塚（縄文）	070	外浦古墳	古墳
032	二の宮貝塚	集落・墓・貝塚	060	天神久保遺跡	包蔵地（縄文）	071	新山西遺跡	包蔵地・古墳？
033	センゲン貝塚	貝塚（縄文）	061	城ノ内遺跡	包蔵地（縄文）・城館跡			

Ⅲ　調査の概要

今回の調査に先立ち、稲敷市教育委員会によって試掘調査が実施されている。調査の結果、溝状遺構が検出され、遺物は、若干ではあるが縄文土器や土師器が出土した。当区域は古墳群に周知されている事もあって、発掘調査が必要とされた。

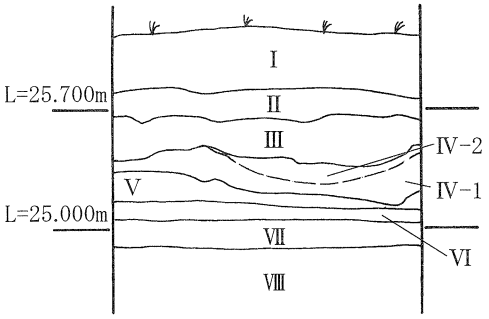
調査の方法は、表土層まで重機を用いて慎重に掘り下げ、遺構及び遺物包含層は人力で掘り下げを行った。

基準点は、日本平面直角座標第Ⅳ系座標に準拠し、Ｘ軸=＋44800、Ｙ軸=－2920の交点を基点として調査区を網羅し、水準点は５号墳上に設置されている三角点より引用した。

実測は、平面図・断面図とも1/20縮尺を基本としている。

写真は、35㎜判白黒、同判カラーリバーサル、６×７判白黒フィルムを使用し、調査の過程で随時撮影を行った。

基本堆積土層は、調査区の西側壁面で観察を行った。表土はⅠ層の耕作土とⅡ層の盛土層からなっている。Ⅱ層は押し固められているためか、非常に締りが強い。このⅡ層を除去したⅢ層上面が遺構確認面となっている。またこのⅢ層は縄文時代の遺物を含む層となっている。層厚は14～30cmとなり厚さに差が認められる。Ⅲ層直下のⅣ層でも同様に層厚の差が見られ、さらに色調の明るさにも差がある。Ⅴ～Ⅶ層は明褐色のハードロームとなり、さほど層厚をもたないで、Ⅷ層の粘質土に移行している。



第４図　基本堆積土層図

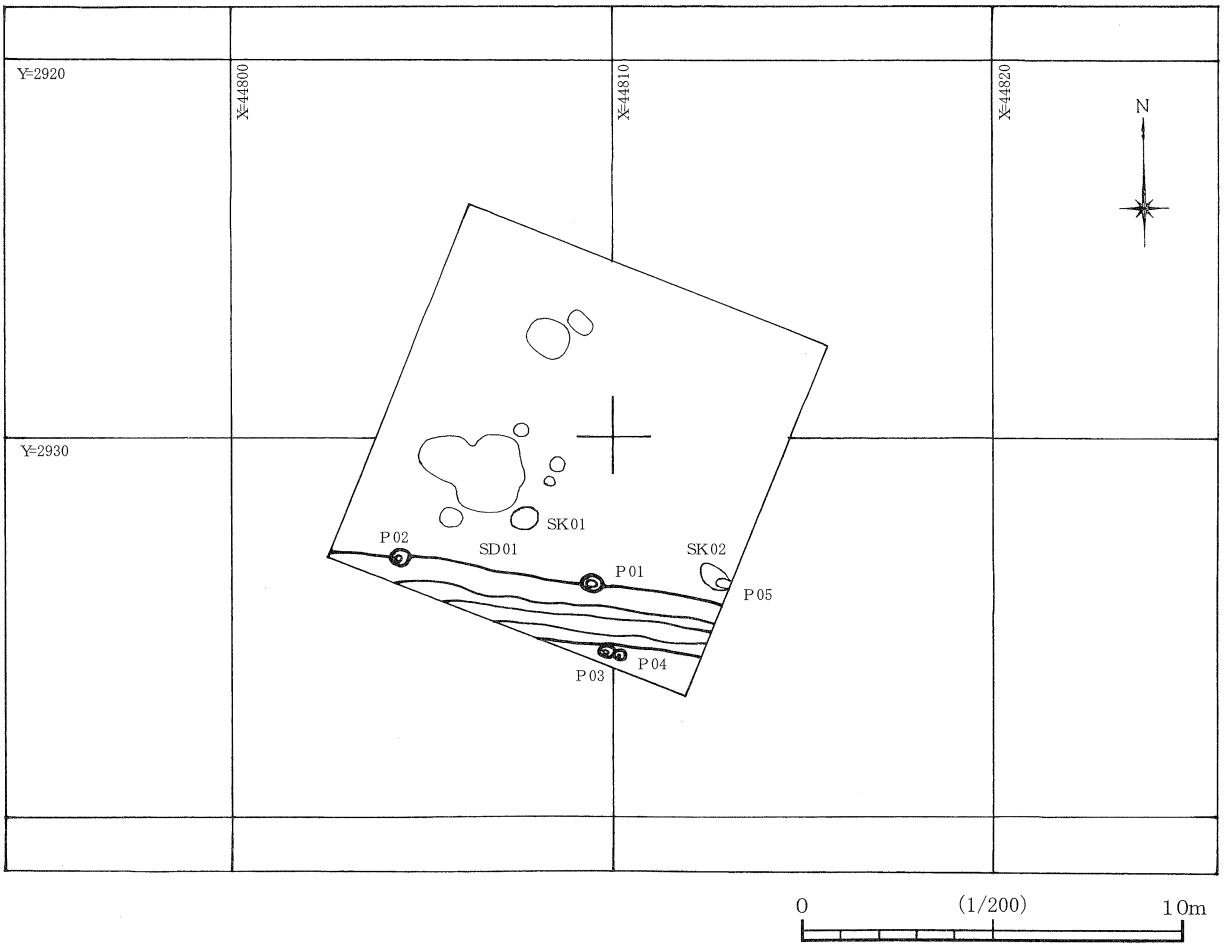
Ⅳ　調査の成果

1．遺構

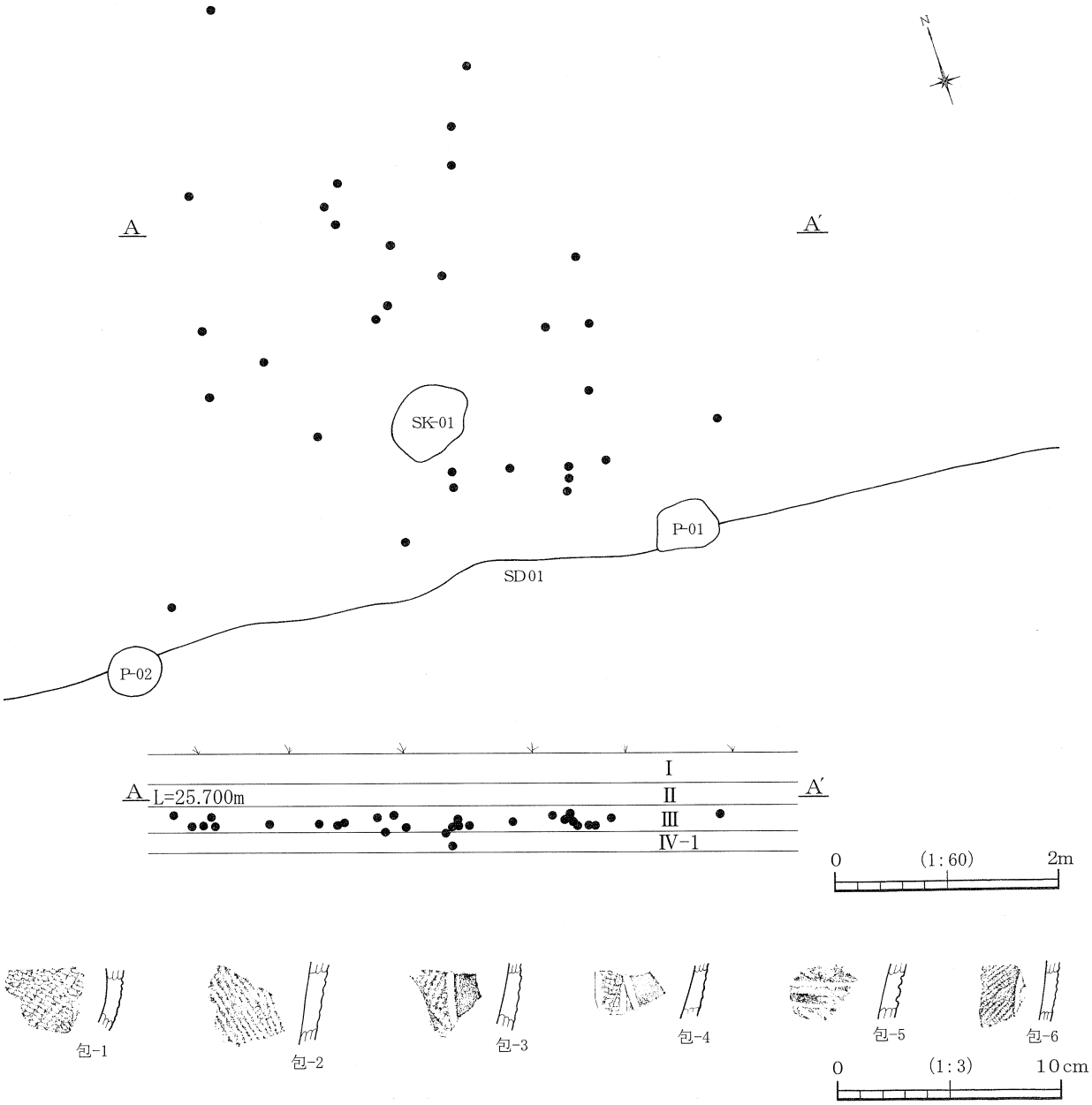
調査区内では、遺物包含層が検出され、その遺物包含層を切り込んで溝１条と土坑２基、ピット５基が検出されている。

遺物包含層は、縄文時代中期の遺物を含むもので、調査区内全体に14～30cmの層厚で堆積している。遺物はほとんどが細片であり、出土状況は焼土を伴った調査区の中央にやや集中する傾向があるものの、ほぼ調査区の全域で出土が認められ、出土傾向に規則性を見出すことはできなかった。遺物包含層を除去した後に、遺構確認を行ったところ落ち込みと思われる土坑状の範囲が認められた。しかし掘り下げを行った結果、形状が一定せず明瞭な立ち上がりが確認されなかった事、遺物が出土しない事などから、遺構とは判断されなかった。

SD-01は、調査区の南壁寄りで検出された。試掘時に確認されたものであるが、溝の南側は調査区外にかかるため正確な規模等の把握は困難であった。走行方向は、Ｎ－80°－Ｗを指し、直線的に東西へ伸びている。重複関係はP-01～04と重複し、本跡が古いと判断される。規模は、上端幅が確認され得る最大値で2.49m、下端幅は0.41m、確認面からの深さは60cmとなっており、全長は不明である。覆土はレンズ状を呈した自然堆積となっている。出土遺物は、遺物包含層からの流れ込みと思われる若干の縄文土器片と石皿片が出土しているのみである。



第５図　　遺構全体図



第６図　　遺物包含層・遺物出土状況図及び主な出土遺物

第２表　　出土遺物観察表１

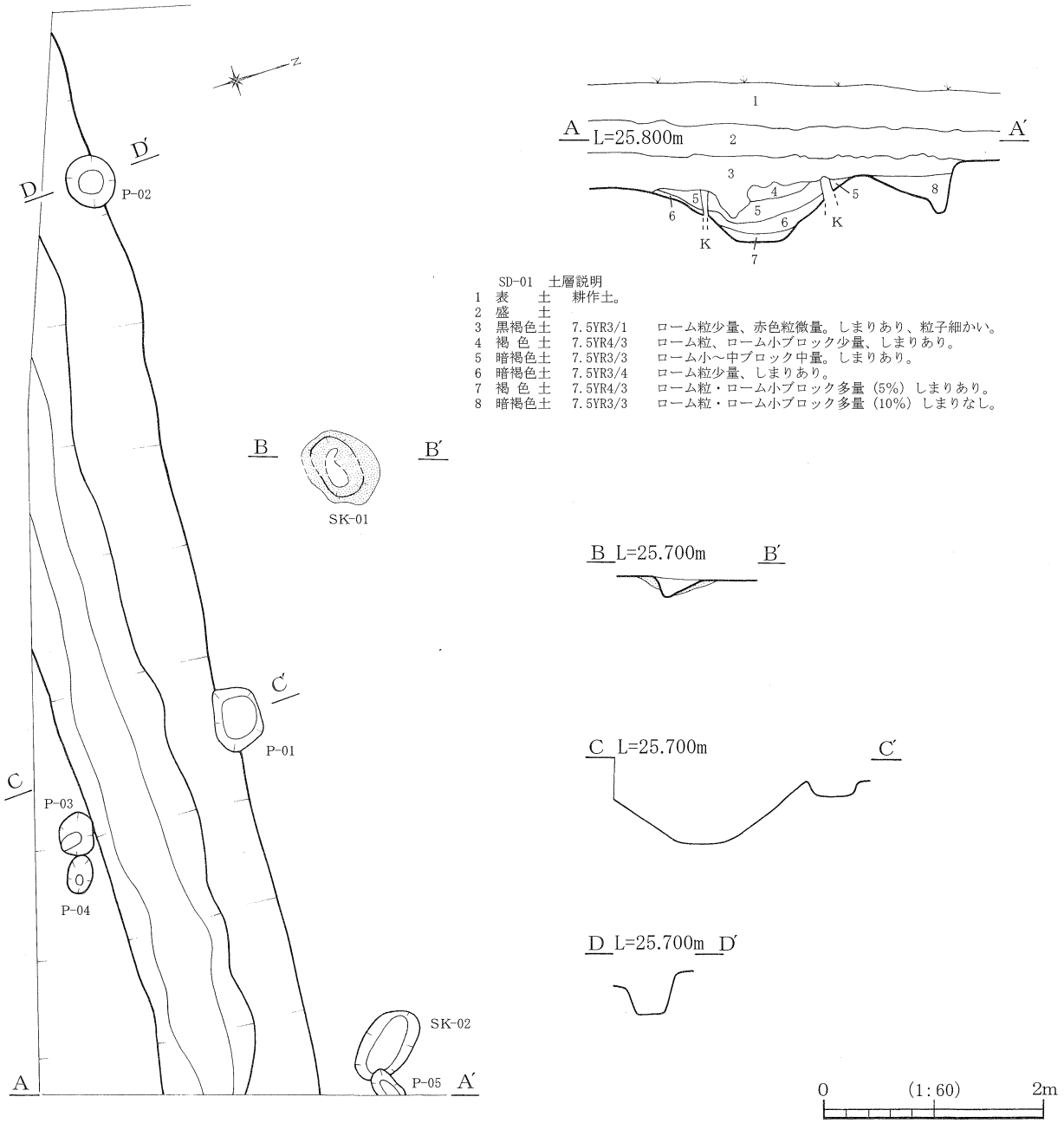
単位・cm

遺構番号	遺物番号	種類器種	口径底径器高	技法・その他	胎土	色調	焼成	備考
包含層	1	縄文土器	—	単節縄文。	石英・砂礫	褐色	良好	
包含層	2	縄文土器	—	単節縄文。	石英・砂礫	にぶい褐色	良好	
包含層	3	縄文土器	—	縦位の沈線による区画。単節縄文。磨り消し懸垂文。	長石・石英	にぶい赤褐色	良好	
包含層	4	縄文土器	—	縦位の沈線による区画。単節縄文。磨り消し懸垂文。	石英・砂礫	にぶい褐色	良好	
包含層	5	縄文土器	—	縄文による原体圧痕。	石英・繊維	にぶい褐色	普通	
包含層	6	縄文土器	—	縦位沈線。細目の単節縄文。	石英・砂礫	にぶい褐色	良好	

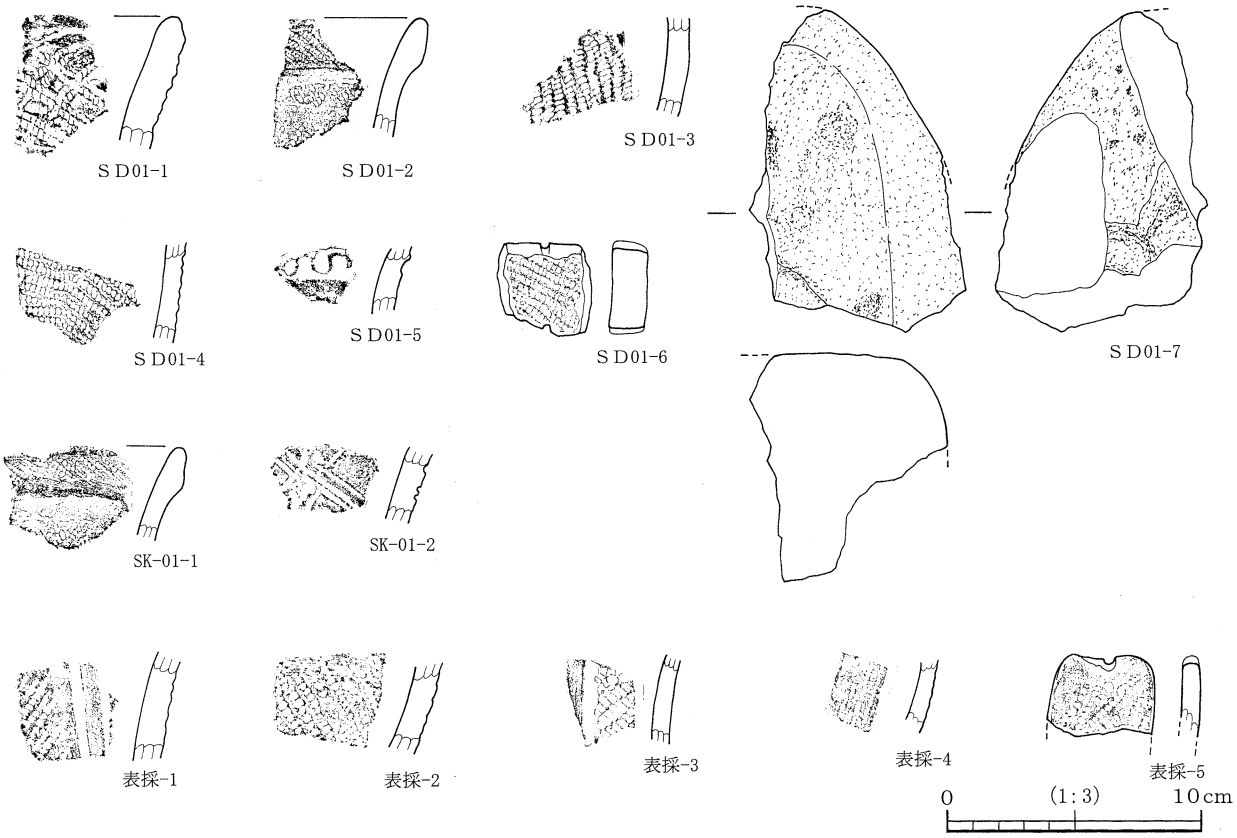
SK-01は、溝の北側1.4mの地点で検出されている。規模は長軸0.72m、短軸0.58m、深さ16cmのやや不整な円形を呈し、ピット状の落ち込みと周囲に若干の焼土を含む覆土が堆積している。覆土中より縄文土器片が出土しているが、包含層の遺物の可能性もある。遺構の性格については不明である。SK-02は長軸0.80m前後、短軸0.45m、深さ42cmの楕円形を呈し、覆土は締まりの弱い黒色土であった。

P-01からP-05はいずれも径0.24～0.26mの円形又は楕円形で覆土は締まりのない黒色土を呈し、溝より新しいピットとなっている。P-05は調査区外にかかっているが、概ね長軸0.40m、短軸0.22mの楕円形である。本跡はSK-02と重複しており、類似する覆土のため新旧関係は不明である。

これらのピット内、P-03は径0.35mの円形で覆土は暗褐色を呈し、SD-01の５層と類似していることから、溝に伴ったピットであると判断される。



第７図　　ＳＤ－０１・ＳＫ－０１・Ｐ－01～05実測図



第８図　　ＳＤ－０１・ＳＫ－０１・表採出土遺物

第３表　　出土遺物観察表２

単位・cm

遺構番号	遺物番号	種類器種	口径底径器高	技法・その他	胎土	色調	焼成	備考
SD01	1	縄文土器	—	口縁部片。縄文による原体圧痕文。花積下層式か。	石英・長石・繊維	褐色	良好	
SD01	2	縄文土器	—	口縁部片。有段口縁。全体に単節の斜縄文を施す。SK01-1と同一個体。花積下層式か。	石英・長石・砂粒・繊維	にぶい褐色	良好	
SD01	3	縄文土器	—	胴部片。単節縄文。	石英・砂礫	にぶい褐色	良好	
SD01	4	縄文土器	—	胴部片。単節縄文。	石英・砂粒	にぶい褐色	良好	
SD01	5	縄文土器	—	胴部片。交互刺突文。花積下層式か。	石英・砂粒	にぶい褐色	普通	
SD01	6	土製品 土器片錘	長さ 3.7　幅 3.6　厚さ 1.4　重さ 23.1g				良好	
SD01	7	石製品 石皿	長さ (11.6)　幅 (7.8)　厚さ (7.4)　重さ 484.6g　石材 多孔安山岩　1/4存				—	
SK01	1	縄文土器	—	口縁部片。有段口縁。全体に単節の斜縄文を施す。SD01-2と同一個体。花積下層式か。	石英・長石・砂粒・繊維	にぶい褐色	良好	
SK01	2	縄文土器	—	胴部片。半截竹管による施文。磨滅著しい花積下層式か。	石英・砂粒・繊維	褐色	普通	
表採	1	縄文土器	—	胴部片。縦位の沈線による区画。単節縄文。磨り消し懸垂文。加曽利式	石英・長石	にぶい褐色	良好	
表採	2	縄文土器	—	胴部片。単節縄文。	石英・砂礫・繊維	にぶい褐色	良好	
表採	3	縄文土器	—	胴部片。縦位の沈線による区画。単節縄文。磨り消し懸垂文。加曽利式。	長石・石英	にぶい褐色	良好	
表採	4	縄文土器	—	胴部片。付加条1種。	石英・砂粒	にぶい褐色	良好	
表採	5	土製品 土器片錘	長さ 3.0　幅 4.0　厚さ 0.6　重さ 12.3g				良好	

V　総括

佐倉原古墳群は、円墳６基が周知され、さらに縄文時代と奈良・平安時代の遺物を包蔵する複合遺跡とされている。古墳は６基の内２基が湮滅するなど地形の改変が著しい中にあって、今回の調査区でも全体に整地された状況が基本堆積土層より確認されている。

そのような状況下の中で、遺物包含層が旧表土直下からローム上面まで堆積しており、周辺での同時期の集落が展開された可能性が窺われる。ただ、今回の調査区域における遺物包含層は、遺物の出土状況に規則性が見出せない上、遺物包含層中に含まれている土器群のほとんどが細片のものばかりで摩滅が著しく、器型及び時期を判断するには厳しい状態のものばかりとなっている。遺物の出土量は少量であり、本報告書で掲載したものは辛うじて縄文前期に位置付けられるものから縄文中期の土器片と土器片錘などが含まれていた事が判別されたに過ぎない。これらの状況を鑑みたとき、今回の遺物包含層は住居跡等の遺構と密接に関連するものとは考えにくい。その中にあって縄文前期の遺物では、有段口縁のものや、縄文の原体圧痕文や交互の刺突文などを施した土器が認められ、これらは細片ではあるものの前期初頭の様相を呈した土器と判断され、花積下層式又は関山式に位置付けられるものと考えられる。

今回の調査で主となる遺構はSD-01ということになる。溝については試掘調査において確認がなされており、調査地点が古墳群の範囲内にある事から周溝の一部である可能性も含めて、溝の性格を把握する必要があった。

溝を調査した結果、溝は遺物包含層を切り込んで東西へ直線的に延びており、断面形状は底面が平坦な台形状を呈する事が判明している。

検出されている形状や覆土の堆積状況から考察すると、まず周溝の可能性であるが、周辺遺跡で既に調査されている古墳の周溝の形状と比較して、溝の走行が直線的である事や断面形状から古墳の周溝である可能性は薄い。次に水路という可能性が指摘されるが、溝の底面には砂や鉄分の沈殿が認められない事から水路として使用された可能性は低いと思われる。さらに古代から中世などに見られる牧を巡る堀や中世の城館跡の堀となる可能性もあるが、近隣にこれらの遺構が所在したとする地名など痕跡が皆無である事や溝の規模が小さい事などから、その可能性も薄いと考えられる。近世期などに見られる害獣侵入防御のための土手に伴った堀の可能性も考えられるが、牧と同様に地名や周辺の立地条件等と照らし合わせて考えたとき、やはり積極的な判断材料に乏しい。最終的に判断されるのは、区画を目的としたものと考えるのが妥当と考えられるが、その目的については、遺構の一部を確認したに過ぎないため明らかにすることはできなかった。

しかし、時期や性格等は明言できないまでも、この溝跡の遺存が物語るように生活の痕跡が存在したことは明らかであり、古墳群の存在と併せて今後の佐倉原古墳群という遺跡を考える上での貴重な調査となったことが、今回の成果という事ができる。

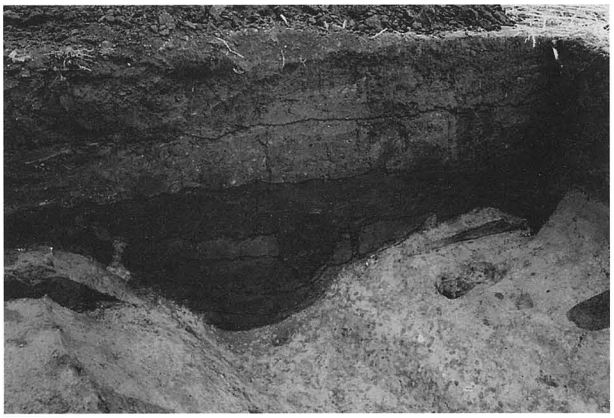
【主要引用・参考文献】

斉藤弘道　2006『茨城県立歴史館資料叢書９　茨城の縄文土器』
関山純也ほか　2007『通源寺遺跡・根木内城跡・野間除土手　発掘調査報告書』松戸市文化財調査報告第41集
縄文セミナーの会　1994『第７回縄文セミナー　早期終末・前期初頭の諸様相』
間宮正光ほか　2001『楯の台古墳群』江戸崎町教育委員会

図版1

調査区全景（北西から）

ＳＤ−０１全景（東から）



ＳＤ−０１土層断面（西から）

ＳＫ−０１全景（北から）

ＳＫ−０１完掘全景（北から）

図版2

SD01－1

SD01－2

SD01－3

SD01－7

SD01－4

SD01－5

SD01－6

SK01－1

SK01－2

表採－1

表採－2

表採－3

表採－4

表採－5

包－1

包－2

包－3

包－4

包－5

包－6

出土遺物

抄　　録

ふりがな	さくらはらこふんぐん
書名	佐倉原古墳群
副書名	移動通信無線鉄塔建設事業佐倉原古墳群地内埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	稲敷市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第4集
編著者名	髙野　浩之
発行機関	稲敷市教育委員会・イー・モバイル株式会社・有限会社山武考古学研究所
編集機関	稲敷市教育委員会　：　〒300-0508　茨城県稲敷市八千石18番地1 稲敷市立歴史民俗資料館内　TEL. 0299-79-3211 山武考古学研究所　：　〒286-0045　千葉県成田市並木町221番地　TEL. 0476-24-0536
発行年月日	2008年３月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
佐倉原古墳群（さくらはらこふんぐん）	茨城県稲敷市佐倉（いばらきけんいなしきしさくら）字佐倉原3045-1外（あざさくらはらほか）	441	164	35°58′33″	140°19′37″	2007.10.15～2007.10.20	100㎡	移動通信無線鉄塔建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐倉原古墳群	古墳群	縄文時代 前期～中期	溝　1条 土坑　2基 ピット　5基	縄文土器 土製品（土器片錐） 石製品（石皿）	縄文時代の遺物包含層と区画溝を検出する。

要約	本遺跡は、古墳群であると同時に、縄文時代及び奈良・平安時代の包蔵地になっている。今回の調査によって、縄文時代の遺物包含層と、時期は不明であるが溝1条、土坑2基、ピット5基が検出されている。縄文時代の遺物包含層は、前期～中期のものとなり、前期では花積下層式のものと思われる遺物が出土している。

資料の取り扱いについて

項目	内容
水洗い	・全て行った。
注記	・次の略号にしたがって遺構番号、出土位置の順で注記した。 遺跡略号　佐倉原古墳群⇒佐古　溝⇒SD　土坑⇒SK　ピット⇒P　包含層⇒包　表採⇒表 尚、注記不可能な細片については、同様の内容を明記したビニール袋に収納した。
接合・復元	・接合は接着剤を用い出来る限り行い、復元は全ての遺物に対して行った。
実測	・遺物実測図は、報告書掲載分についてのみ作成した。
写真撮影	・遺物写真は、掲載した遺物に対して全て撮影した。
台帳	・図面台帳、遺物台帳、写真台帳があり、それぞれの資料が検索可能であるように作成した。
出土遺物収納状況	・遺物は、報告書使用の遺物番号で統一して保管している。
資料の保管場所	稲敷市教育委員会

茨城県稲敷市
佐倉原古墳群

印刷　平成20年　3月20日
発行　平成20年　3月30日

編集　山武考古学研究所

稲敷市教育委員会
発行　イー・モバイル　株式会社
有限会社　山武考古学研究所

印刷　㈲京文社印刷
TEL.　043-242-0064